

# Kyogen Scripts in Kanazawa University's Possession: A Bibliographical Introduction and Reprint

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/34626">http://hdl.handle.net/2297/34626</a>             |

## 金沢大学本狂言集

### ― 解題と翻刻 ―

西村 聡

#### 【解題】

ここに翻刻して紹介する金沢大学人間社会研究域日本語学日本文学研究室蔵狂言本（仮に金沢大学本狂言集と呼ぶ）は、江戸末期頃の写と推定され、大藏流の本文を伝えている。表紙は縦二四・三センチメートル、横一六・九センチメートルの大きさである。左肩に題籤は貼られているが題は記されず、内題も無く、狂言の曲名を各曲の冒頭に記す（各曲の最初の丁の表左肩に朱記もしている）のみである。墨付は五一丁、漢字の読み仮名や平仮名の振り漢字を朱書、若しくは墨書する箇所がわずかに見られる。紙には虫食いが多く、判読不可能な箇所が少なくないが、丁寧に紙を裏打ちし、表紙や綴じ紐も新しくしつらえている。その分、現在の五一丁が本来の規模を伝えるか否かの判別はつきにくい。序跋・奥書・識語等、伝来の事情を知る手がかりは一切なく、本来この規模で一冊なのか、また複数冊の中の一冊なのかも分からない。

収載曲は〈舎弟〉〈成上り〉〈花あらそひ〉〈柑子〉〈萩大名〉〈不

腹立〉〈居杭〉〈清水〉〈鷹盗人〉〈飛越〉の一〇曲である。〈舎弟〉は集狂言、〈成上り〉〈花あらそひ〉〈柑子〉〈居杭〉の四曲が小名狂言、〈萩大名〉は大名狂言、〈不腹立〉と〈飛越〉が出家座頭狂言、〈清水〉は鬼山伏狂言に分類される。脇狂言・智狂言・女狂言に分類される曲は含まれていない。この一冊としての選曲や配列にどういう意味があるかは、まだ見当が付かない。

そこで取りあえず江戸後期写の大藏流諸本と比較して、金沢大学本狂言集の特徴をいくつか数え上げておくことにしたい。比較に用いる諸本は、寛政四年（二七九二）写の大藏虎寛本（笹野堅校訂『大藏虎寛本能狂言』上中下、岩波文庫、一九四二年〜一九四五年）、文化一四年（二八一七）写の大藏虎光本（橋本朝生編『大藏虎光本狂言集』一〜四、古典文庫、一九九〇年〜一九九二年）、江戸末期写の山本東本（小山弘志校注『狂言集』上下、日本古典文学大系、岩波書店、一九六〇年・一九六一年）の三本である。なお山本東本は〈舎弟〉〈花あらそひ〉〈鷹盗人〉の三曲を欠いている。

まず各本の冒頭の一文を取り出してみると、次のようになる。

〈舎弟〉

- ・是は此当りに住居致すもので御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御座る。（大蔵虎寛本）
  - ・罷出たる者ハ此当リニ住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
- 〈成上り〉

- ・是は此当りに住居致すもので御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御さる。（大蔵虎寛本）
  - ・是は此当りに住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
  - ・これはこのあたりに住まい致す者でござる。（山本東本）
- 〈花あらそひ〉

- ・是ハ此当りに住居致すもので御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御座る。（大蔵虎寛本）
  - ・是は此当リニ住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
- 〈柑子〉

- ・是ハ此当りに住居致す者で御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御さる。（大蔵虎寛本）
  - ・是は此当リニ住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
  - ・これはこのあたりに住まい致す者でござる。（山本東本）
- 〈萩大名〉

- ・かくれも無ひ大名です（金沢大学本）
- ・速国にかくれもない大名です。（大蔵虎寛本）
- ・隠れもない大名です。（大蔵虎光本）

・速国に隠れもない、大名です。（山本東本）

〈不腹立〉

- ・罷出たる者は此当りに住居致すもので御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御座る。（大蔵虎寛本）
  - ・是ハ此当りに住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
  - ・これはこのあたりに住まい致す者でござる。（山本東本）
- 〈居杭〉

- ・是ハ此当りに住居致す居杭と申者で御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致するぐひと申者で御さる。（大蔵虎寛本）
  - ・罷出たる者は此当リニ住居致居杭と申者で御座ル。（大蔵虎光本）
  - ・まかり出でたる者は、このあたりに住まい致す居杭と申す者でござる。（山本東本）
- 〈清水〉

- ・是ハ此当りに住居致す者で御坐る（金沢大学本）
  - ・是は此当りに住居致す者で御さる。（大蔵虎寛本）
  - ・是ハ此当りに住居致者で御座ル。（大蔵虎光本）
  - ・これはこのあたりに住まい致す者でござる。（山本東本）
- 〈鴈盗人〉

- ・速国に隠もなひ大名で御坐る（金沢大学本）
  - ・速国に隠れもない大名です。（大蔵虎寛本）
  - ・隠も無イ大名です。（大蔵虎光本）
- 〈飛越〉

- ・罷出たる者ハ此当りに住居致者で御坐る（金沢大学本）

・是は此当りに住居致す者で御座る。(大藏虎寛本)

・是(罷出たる者)ハ此当りニ住居致者で御座ル。(大藏虎光本)

多くの曲で諸本一致するが、傍線部のような差異も見られる。この分布だけからは金沢大学本は大藏虎寛本と一致する例が比較的多いといえるが、〈不腹立〉のように金沢大学本のみが他本と異なることもあり、〈鷹盗人〉のように金沢大学本のみが大名の名乗りに「です」を用いない理由が不明な例(大名の名乗りにには尊大な語感を与える「です」を用いることが多く、金沢大学本でも〈萩大名〉ではそのようにしている)も含まれている。

細かな差異は、たとえば〈舍弟〉に、

・夫先月の地蔵講は辻のきやうぶ三郎か所であつた(金沢大学本)

・夫先月の地蔵講は辻の三郎が頭では無つたか。(大藏虎寛本)

・夫先途の地蔵欄ハ辻の三郎が当でハ無イか(大藏虎光本)

というような例も見られるが(注)、〈成上り〉の次の例は、何が何に成り上がるという、曲の根幹部分の差異である。

・雀海中に入て蛤と成り鷹草化して苔と成(\*「鷹化して鳩と成る」

が「高草化して苔と成る」と転訛した形か)ノ子犬か親犬に成ノ

田辺の別当の口縄太刀(金沢大学本)

・嫁が姑に成上るノえのころが親犬に成るノ渋柿が熟しに成上るノ

山の芋がうなぎに成るノ田辺の別当の口縄太刀(大藏虎寛本)

・姫が古ふ成と姑二成ノ犬子等が大きふ成と親犬二成ルノ田鼠(もぐら)化して鶉二成ルノふさふ(腐草)化して蛩に成ノ田辺の別

当の口縄太刀(大藏虎光本)

・嫁が姑に成るノえのころが親犬に成るノ渋柿が熟致いて、甘う成るノ山のいもが鰻に成るノ田辺の別当の、くちなは太刀(山本東本)

などは、金沢大学本と大藏虎光本とで、傍線部に故事成語的な言い回しを用いる姿勢が通ずるようである。江戸初期寛永一九年(一六四二)写の大藏虎明本(池田廣司・北原保雄著『大藏虎明本狂言集の研究本文篇中』表現社、一九七三年)が《嫁・姑、山芋・鰻、渋柿・熟柿、子犬・親犬、俗・出家、田辺の別当の口縄太刀》という組み合わせであることからすると、大藏虎寛本と山本東本がこの基本ををほぼ継承し、金沢大学本や大藏虎光本はそれらとの差異化を図るかに見える。

「桜」と「花」の証歌を列挙してゆく〈花あらしひ〉では、本ごとに証歌やその組み合わせ、順序がどれも異なる。江戸初期の大藏虎明本では、

A 桜ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける

B 行暮て木の下かげをやど、せば花やこよひのあるじならまし

C 山ざくらかすみの間よりほのかにもみてし人こそ恋しかりけれ

D 花の色はうつりにけりないたつらにわがみ代にふるながめせしまに

という証歌の組み合わせ、順序であつたが、虎寛本ではA・D・C・Bの順、虎光本ではC・B・Dの順でAが無く、BとDの間にBと同じ作者(薩摩守忠度)の歌、

・漣や志賀の都はあれ二しを昔なら(なから)の山桜かな

を挿入している。そして金沢大学本では、C・D・Aの順でBが無く、Aの後に、落花を降雪に見立てた縁で、百人一首で知られる藤原公経作の歌、

・花さそふあらしの庭の雪ならてふり行ものはわかミ成りけり  
を証歌としている。〈成上り〉同様、大蔵虎光本と金沢大学本とで大蔵流の基本を少し外れる傾向が見て取れる。

最後にもう一点、金沢大学本では〈居杭〉の末尾の丁裏が、

なれ此よふに八卦本を取りらし其上算木か沓本も御坐らぬこなたの持せられて役にたゝぬもので御坐る返させられい

で途切れていることに注意しておきたい。このあと、他の本では居杭の仕業と気付かない亭主と算置が混乱し、喧嘩する騒ぎとなり、騒ぎを収めるために居杭が出て追い込まれる。それだけの展開を残すにもかかわらず、そして丁裏の紙の途中で、金沢大学本では文字が途切れている。書写した元の底本がすでに以下を欠いていた可能性を考える必要がある。

以上、現段階で気付いた金沢大学本の特徴点をいくつか数え上げてみた。さらに細部の差異を比較し、大蔵流狂言本史における金沢大学本の位置を見定めるための検討は今後、少しずつ進めてゆきたいと思う。大方の御教示をいただければ幸いである。なお、翻刻本文の入力には金沢大学大学院人間社会環境研究科上島眞智子・遠藤真澄、金沢大学人間社会学院人文学類青木沙知・村谷佳奈各氏の助力を得た。記して感謝する。

〔注〕伊藤源之丞本（永井猛・高橋修三『宮島大蔵流狂言台本伊藤源之丞本下』

米子工業高等専門学校国語研究室、一九八九年）に金沢大学本と同じ表現が見られる。



（表紙）

【翻刻】

舍弟

是は此当りに住居致すもので御坐る某兄を沓人持て御さるかはさへ参れハ某か有名をハ申さいて舍弟くんと申此舍弟と申事ハ能事やらあしい事やら某ハそんなせぬ爰に御こゝろ安ふいたす御方か御坐るこなたハ万事御こうしやで御さるによつて是へ参り舍弟の様子を承らふと存る先急て参らふイヤ誠にかう参つても御宿に御されハよふ御さるか内ニさへ居られたならハおしへて被下ぬと申事ハ御さるまいイヤ何かと申うちに是て御さる先案内を乞ふもの申案内申

イヤ表にも申とある案内とハ誰そもの申となたて御坐る私  
て御座る そなたならハ案内に及ふかかう通りハせいて 私も左様  
にそんな御座れともし御客でも御さらふかと存て夫故案内を乞  
まして御さる 夫ハ念の入た事しや如何と思ふておりやつた 唯今  
参るも別の事でハ御坐らぬこなたハ私の兄を御存て御坐るか いか  
にも知りて居る 此兄の方へ参れハ私のある名をハ申さいて舍弟  
くと申此舍弟と申事ハ能事やらあしき事やら私はそんなせぬこ  
なたは万事御こうしやて御坐るによつて舍弟の様子をおしへて下さ  
れい 某も其様な事ハそらてハ覚へぬ爰に書たものか有程に是を見  
ておしへてやらふ先夫にまたしめ 心得ました 是ハいかな事あの  
年に成まで舍弟と申事をしらぬと申あのやうなものに誠をおしゆる  
ハいかゝて御坐るすじも無事をおしへ兄弟けんくわをいたさせうと  
存る 是く書たものを見たれハ舍弟といふハあまり能事でも無程  
に是ハ聞すと置しめ 夫ハ弥こゝろもとなふ御坐る何卒おしへて下  
されい 夫ならハかならず兄とけんくわをさしますな 何かさて心  
得ました 先舍弟といふ事ハ人のものを何なりとも案内なしに袖に  
くらへて取て戻るを舍弟と申 扱は盗人の事で御坐るか イヤく  
盗人といふ程の事でハ無かまつ夫に近い事しや なふはら立や兄の  
身として弟を盗人にいたした 夫くそれおミやれ某か前てさへ其  
様にはらを立かならず兄の方へおりやるな 参る事でハ御さりませ  
ぬ私はもふかう参りまする もはやおりやるか さらはく よふ  
おりやつた ハアなふはら立や兄の身として某を盗人にした急て参  
りこのぞんぶんの申そうと存るイヤ誠に兄の身として弟を盗人にす

るといふか有ものかちか頃はらの立事で御坐るイヤ何かと申うちに  
是て御坐る申兄じや人御座るか御さりまするか イヤあれハ舍弟か  
声て御さる舍弟おりやつたかく あまり舍弟くといふてもらい  
ますまい こなたはきけんかあしきか路してけんくわてもしてきた  
か 相手の無けんくわか成ものか 夫ならハ酒にても酔ふてきたか  
呑ぬ酒に酔ものか 夫ならハ何かはらか立ぞ そなたか舍弟といふ  
かはらか立 舍弟しやもの舍弟といわいて何といふものか イヤ  
くけふよそて聞てきたれハ舍弟といふハ盗人の事しやけないつ某  
か盗ミをした事か有そ 是ハいかな事たそなふつておこされたもの  
てあらふ先よふきけ先世間ててゝ親の事をしんぶといゝ母親をお袋  
兄をしやきやう弟を舍弟そなたハ某かためにハ弟じやによつて舍弟  
といわいて何といふものか 先世間ててゝ親をしんぶともこんぶと  
も母親をお袋ともだん袋ともおしやれ某におゐて舍弟した覚か無そ  
なたこそ舍弟した覚かあらふ 今聞ハ舍弟といふは盗人の事しやと  
いふかいつ某か盗ミをした事かあるか いふたならハ恥をかこう  
恥をかく覚か無有ならハいへ 夫ならハ申そう夫先月の地藏講は辻  
のきやうぶ三郎か所てあつた 夫か何とした こなたハ三郎か所の  
次の間にある大てんもくを袖にくらへて取て戻たてハ無か あれハ  
三郎に貰ふてきた 貰ふたものを跡から取におこすものか夫も貰ふ  
たにせよまた御坐る 有ならハ早ういへ またとれからやらまたら  
のうしを舍弟してきて白い所を墨で染ならびの市へ引て出て売たて  
ハ無かそのやうなものハ某か方てハてんもく舍弟のまだら舍弟とい  
ふおのれハ憎いやつ兄の恥ハおのれかはじおのれかやうなものハま

つかうして置かよひ 兄しやといふてまくる事てハなひイヤアく  
爰な天目舎弟のまだら舎弟め勝たぞく ヤイく兄を此やうにし  
てとれへ行とらへてくれいやるまひぞく

### 成上り

罷出たる者ハ此当りに住居致すもので御坐る今日ハ清水のゑん日て  
御坐るに依て参詣致ふと存る先太郎官者を呼出し供を申付ふヤイ  
く太郎官者有かやい ハア 居たか 御前に居りまする ねのふ  
早かつた 汝を呼出す事別の事ても無けふハ清水のゑん日しやに依  
て参詣する程に汝ハ供をせい 畏て御坐る 夫ならハ汝ハ太刀を持  
て心得ました御太刀持まして御座る 夫ならハ押付て行ふ 夫か  
よふ御坐る サアくコイく 参りまするく ヤイ太郎官者あ  
れへいたならハ今夜ハ通夜をするに依てそふ心得い 何か扱心得ま  
した イヤ何かといふうちにはや御前しや汝も夫へ寄て拜め  
心得ました ヤイ太郎官者いつ参てもしんくとしてよい御前しや  
な 其通能御前て御坐る 扱某ハ通夜をするに依て汝も夫へ寄て休  
め 畏て御坐る扱もくいつもとはいゝながら今夜夥敷籠りて御坐  
る去らハ休もふエイくヤツトナ 名乗是ハ此当りに住居致す心の  
直に無者て御坐る今日ハ清水のゑん日て御坐るに依てあれへ参り仕  
合を致そふと存るイヤ誠に此間ハ不仕合て御坐るに依てけふハ門出  
を祝ふて御坐る何そ仕合の無と申事ハ御坐るまひイヤ参る程にはや  
是て御坐る扱もく今夜ハ大籠りて御坐る扱何そよいものハなひか  
しらぬ去ハこそ是に能太刀を持てよねんものふねて居るあれを取た

ひものしやか何と致ふイヤ致様か御坐るのふく嬉しや急てもとら  
ふ嬉しやく ア、能ふねた事しややははいかな事最前御太刀を持  
て居たかはハ竹杖て御坐る是ハ何とした事てあらふそイヤ夫と頼ふ  
た人ハ正しきな御方しやに依て面白おかしう申上ておかふと存る見  
れハ夜か明た是をかくいて頼ふた人をおこそふ 申と夜か明ました  
誠に夜か明たヤイ太郎官者いさ下向せふ 夫かよふ御坐る サア  
くコイく 参りまするく ヤイ太郎官者夜前ハ大籠て有た太  
郎官者くヤイ太郎官者汝ハ何をして居る 何も致しませぬ サア  
くコイく 参りまするく 扱夜前ハ大籠りて有つた 御意之  
通大籠りて御坐りました 扱何ぞ珍敷咄も無か 色と御坐る中にも  
ものゝ成上ると申咄しをいたして御坐るかこなたにハ聞やられて御  
坐るか イヤ何共聞ぬして何と言ふた 先私の脇に居るものか申ま  
するハ雀海中に入て蛤と成り鷹草化して苔と成と申ました 某も聞  
てハ居れと成たを見た事か無ひ 私とても其通りて御坐る また外  
に咄しハないか また御坐りまする子犬か親犬に成と申ました 爰  
なもののハ子犬も親犬に成らいて叶ぬ事しや 誠に其通りて御坐る  
サアくコイく 参りまするく 扱外に咄しハ無か また御坐  
りまする田辺の別当のくち縄太刀と申咄しを致して御坐るか聞せら  
れて御座るか イ、ヤ何共聞ぬ 先此田辺の別当の口縄太刀と申ハ  
常の太刀てハ御座れ共すハ盗人と申せハおのれとぬけ出口縄と成て  
盗人を追イはしらかすと申則別当も福貴の身と成られたると申惣し  
てものゝ成り上ると申ハ目出度事て御坐てこなたにも目出度事の御  
坐らふはし口致て御道具のうちに成上たものか御坐る 身共か道具

の内に何か成り上た ものか成り上りました なにか ものか 何か 御寿命八万と年と御太刀か此様なつへ竹に成上りました 夫こそ目出度けられて休め ハア エイ ハア

#### 花あらそひ

是ハ此当りに住居致すもので御坐る承れば四方山の花が盛りじやと申に依て今日ハ花見に参らふと存る先太郎官者を呼出し供を申付ふヤイく太郎官者あるかやい ハア 居たか 御前におりまする汝を呼出す事別の事でも無聞ハ四方山の花が盛りじやと言によつてけふハ花見に行ふと思ふか何と有ふぞ 四方山江行せらりやうより私の鼻を見させられい 愛な奴ハ汝言ハその鼻の事某かいふハ野山に咲桜花の事じや 私の前でハよふ御坐るか何もの御前で其様な事を仰られたならば恥をかゝせられませふ 恥をかこうとハ すべてに古歌にも桜とこそよふで御坐れ花とは御坐りますまひ おのれかすいさんな古哥だて古歌にあらばいふて聞せひ 心得ました山桜霞の間よりほのかにてミてし人こそ恋しかりけれ何とさくらてハ御坐らぬか 夫は定而花であらふ こなたの分て古哥を直す事はなりますまい 某か方（カタ）と朱で傍訓）にも花といふ歌がある あらハ仰られい 花の色はうつりにけりないたつらにわか身よにふるなかめせしまに何と花ては無か それも桜て御坐りませう 汝か分て古哥ハ直されまひ 私のかたにハまた御坐る 有ならハはやうよめ 心得ました桜ちる木の下かけハ寒からて空に知られぬ雪そふりける何とさくらてハ御坐らぬか 夫も花てあらふ 兎角こなたの分て古哥

ハ直されますまひ 身ともか方（カタ）と朱で傍訓）にもまた花といふ哥がある あるならハよませられい こゝろへた花さそふあらしの庭の雪ならてふり行ものはわかミ成りけり何と花てハ無か ちと待て下されい 心得た 是ハいかな事 頼ふた人とし無古歌あらそひをして桜と申哥にほふどつまつた何と致そふ夫く頼ふた御方ハ謡を御存あるまひ謡てつめてやらふと存る申く私のかたにハ桜と申謡か御坐るかこなたのかたにも御坐るか 汝か方にあれハこちにもある有ならばはよふうたへ 心得ました（節）さくらかざしの袖ふれては なミくるまくるゝより月の花よまとふよ こなたもよふ御そんして御坐る 何ても無事しさりおれ ハア エイ ハア

#### 柑子

是ハ此当りに住居致す者て御坐る夜前さる方へ参り大御酒で御さつた夫ニ付坐しきをたつ時分太郎官者に何やら預けたと思ふて御坐るがはつたとわすれて御坐る呼出し承ふと存るヤイく太郎官者有かやい ハア 居たか 御前に居まする ねんのふはやかつた汝を呼出すも別の事でも無やせんハ大御酒で有たてハなひか 御意の通り大御酒で御坐りました 夫ニ付座敷を立時分に汝に何やら預けたと思ふたか何て有たそ 私も御次で御酒を被下まして御坐るによつてはつたとわすれまして御ざる 何てやら有た 是ハいかな事三ツなりの柑子で御さる被下たと思ふてくふて仕舞た何といったそふ ヤイく太郎官者今思ひ出した三ツなりのこふしてあつた 誠に柑子で御坐りました 其柑子を是へおこせ されハ其事で御坐る先世間



に二ツなりさへまれに御さるにまして三ツなりハ珍ら敷とそんなしてこふ手にさけて御供いたして御されハ一ツほぞぬけかいたして門外さしてころりくところけまするによつて私の言葉をかけました何とかけた ヤイくこうしものいてすと言何方へ行そやるまひぞくと申て御されハさか柑子もころ有て木の葉一ようたてにつきとまりまして御ざる取て手に取上まして扱とおのれハにくいやつのはぞなぞのぬくるといふ事か有ものかと申て皮をもむき白ひ筋をも取壺口にたへまして御ざる 是ハいかな事夫をくふといふか有ものか残のこふしを早うおこせ 此度又ほそかぬけてハなるまひとそんしふところへ入て御供いたして御されハふところのうちかヒイヤリといたして御さるに依て何事かとそんなしてミて御されハれいの角つばにおされてつぶれました是をも取出しまして扱とおのれハにくいやつのはなそにおされてつふるゝといふか有ものかと申て此度腹もたちますかわもすちも取らす只一くちにたへまして御ざるこゝな者ハ壺ツならす二ツ迄くふといふか有ものかのこりの柑子を是へおこせ 夫ニ付あわれな物語か御さるかたつてきかせませふよふきかせられい こゝろ得た 扱も平相国の御時國へ流給ふ流人あまた有中にも丹波の少将成経平判官康頼入道俊寛僧都是三人ハいほふか島へなされ給ふされとも二人ハさめん有て本国へかへさるゝ俊寛壺人かの島にとゝめ置るゝ其ごとく三ツなりしこふしも(節) 一ツハほそぬけ一ツハつふれ今一ツのこりたる柑子めかしんちう人と柑子ハかわれともをもひハおなし涙かな 何とあわれなものがたりてハ御さらぬか 夫は俊寛僧都のむかし物かたりてかて

んじやのこりのこうしをはよふおこせ 柑子ハ今の物かたりて御さる 扱とおのれハにくひやつ其柑子をおこさねばあとへも先へもやる事てハなひそ 只今思ひ出しました 何と 物と 何と 物と何と 其柑子も こうしも 太郎官者かろく原へとうと納りました何てもなひ事ひさりおれ ハア エイ ハア

#### 萩大名

かくれも無ひ大名です此間ハ久しく何かたへも出ねハ心かくつしてあしう御坐るけふはとれへぞ遊さんに出うと存る先太郎官者を呼出し談合致そふヤイく太郎官者有かやい ハア おるか 〱 ハア居たか 御前に 早かつた汝を呼出す事別の事てもなひ此間ハ久數何方へも出ねハ心かくつしてあしうけふハとれへぞ遊山に出うとおもふか何とあらふそ 是ハ一段とよふ御坐りませう 夫ならハ此当りハおふかた見物したによつて珍ら敷所に行度ものじや何方かよからふそ 仰らるゝ通り此当りハおふかた御見物なされました珍らしい所へ御供いたしとふ御坐るか何かたかよふ御坐りませうかイヤ下京辺によい庭を持たれた御方か御坐る是に宮城野の萩か盛て御さる是へ御供いたしませう 夫は行度ものしやか亭主と知人て無に依て行まひ か様の事も御さらふかと存て兼ゝ私の知人に成て置ました夫は一段の事しや夫ならハ追付て行ふ 先待せられい 待とハあれへ行せらるれハ亭主か哥を好まするかこなたにハ其歌かなりまするか 某も久舖ううたわぬか亭主か所望ならハ一節や二節ハうたおふまてよ 是ハいかな事こなたの仰らるゝハ小唄の事私の申ハ三十

一字有哥の事で御さる 愛な者ハ三十巻字ある唄もあらふまた五拾字百字の哥もあらふハさて 去とてハ左様でハ御坐らぬ三十巻文字に限り五文字七文字に萩の花を折入当座によむ哥の事で御坐る 其様な六ヶ敷事ならハ身ともハ行まひ 是程に思召立まして行せられぬハ気のどくで御坐るか夫と此間当りの若ひ衆か萩の花を見に行と有て哥の下読をなされたか御さる是をこなたへおしへましてハ何とて御さる 是ハ一段とよからふ何と言うたしや 別に六ヶ敷事も御座らぬ七重八重九重とこそ思ひしに十重咲出る萩の花かなと申分の事で御坐る 先ハおもしろそふな哥しやそれハたれかいふ事しやこなたの仰らるゝ事で御坐る 身ともひとりして 哥一首を幾人てよむものて御さるぞ いかなく其様な六ヶ敷事が老年や二年習ふて覚らるゝ事ではなひ 此分の事かなりませぬか いかなくならぬ事しや 夫ならハものによそへてハ何と御坐りませう いかに某かぐどんなどいふてものによそへたならハ覚へられぬ事はあるまひして何によそへる そふじて扇子の骨八十本あるものて御坐る七重八重と申時分に七本八本と御めに懸ませう九重とこそに九本十重咲出るに皆ひらいてハ何と御さりませう 是ハ一段とよからふまた跡に何やら有たてハないか 跡の萩の花かなハこなた覚させられいそれも何そによそへて呉ひ 是ハ何もよそへるものか御さらぬか夫とこなたの常と私をしからせらるゝにあのすねはきの延たのかこうたのと仰らるゝはきの花かなと申時ハ慮外ながら私のむかふすねと鼻の先を御目に掛けてハ何とて御さる 是ハ一段とよからふそれならハ追付て行うさあくこいく 参りまするく 太郎官者其庭ハ

いかやうの庭じや 打ひらいた能庭で御坐るあれへ御出なされたならハ何かをさし置いてほめさせられい ほめてよい事ならハいか程もほむるであらふ程は違ひか 今少して御坐るいそかせられい 心得た イヤ何かと申うち是で御さるこなたを御供いたした由を申ませう先夫にまたせられい 心得た もの申案内申 表にもの申とある案内とはたそ もの申 となたで御坐る 私で御さる エイ太郎官者とのそなたならハ案内に及ふかなせに通ひハせいて わたくしも左やうに存て御さるか若御客ばし御さらふかとそんなしてそれゆへ案内を乞まして御さる それハ念のいつた事しやさて何と思ふておりやつた 唯今参るも別の事でハ御さらぬこなたの御庭を私の頼ふたものか承り及まして見物致度と申まするか見せて被下りやうならハ近頃忝ふ御さる 夫は安い事でハあれ共此間ハぶそうじじやによつて御めにかくる事は成まひ 其分ハ苦舖御さらぬもはや御もん前迄出て居られまする 何じや門外迄御出なされたとおしやるか 中く 夫ならハ御めに掛う程にかうとふらせられいとおしやるべくゝろへました 某をも能時分に引合せて呉さしめ 畏て御さる申し通らせられいと申まする 心得た亭主ハうちか 左やうて御坐る つゝと通らふか 夫かよふ御坐る ハハア是は打ひらいた景のよい庭じや逆もの事にゆるりとミやうせうきをくれい 畏て御さる御亭主夫へ出させられい 心得ました 御せうきて御坐る 太郎官者はへ出ひ 心得ました 是は聞たよりも打開ひて景のよい庭しやな 其通ひて御坐るそれへ出られましたハ是の御亭主で御坐る なふく御亭主けふはふと庭を所望したれハさつ速見せておくりやつ

て果分におりやる ぶそうじな所江御腰を掛させられて近頃面目も御坐らぬ ヤイ太郎官者ぶそうじとおしやるか角からすミにちりか一ツ無 常にそふじのものを付ておかれまする そふてあらふ太郎官者くあれに何やら六ヶ敷木があるかあれハ何しや あれハ梅のこぼくて御さる 何しやこぶくじや シ、古木で御坐る なふく御亭主古木見事ておりやる あれは私のひそふの木で御さる そふてあらふ太郎官者あの古木につうと地をほふて上へきつと立延た枝か有あれかよひしものがある 何になりまする あそこから引切て茶うすの引木 シ、亭主か承りまする きかふな 左やうて御さる御亭主引きりなとめさるな 左やうの事にはいたしませぬ 夫かよふおりやるヤイ太郎官者あの島先に何やらよせかけたものがあるあれは何しや あれハ建石で御さる 竹石じや シ、たていして御さる なふく御亭主たていし見事ておりやる 北山より引せまして御坐る そふさな事しや太郎官者あのたて石にきり小ふし程しろい所か有あれかまた能しものか有 何となりまする あそこからちやつと打かいて台所の火打石 シ、亭主か聞きまする なふく御亭主打かきなぞ召るなや 左やうの事ハいたしませぬ 太郎官者あれに又赤飯を打ちらしたやうにまつかいにミゆるハあれハ何しや あれハミやきの、はきて御坐る かの六ツ敷のか 左様で御坐る なふく御亭主萩見事におりやる 此間ハ落花いたして御さる 落馬した シ、らつくわて御坐る 落花見事て御さる すへになりまして御坐る太郎官者との御そんしの通り仰上られて下されい 心得ました イヤ申是の御亭主の申されまする是へ御腰を掛させられた御

方へハ哥を一首所望いたしまするこなたも一首よふて下されいと申まする 何しや亭主か歌を好む 中く イウく 御亭主某八田舎ものて哥などよふだ事かなひ是ハゆるいてくれさしめ それハ定而おひけて御さりませう老ツハ私の外聞て御座るに依て何卒よませられて下されひ 太郎官者うたをよめハ外聞になるとおしやるかな事か外聞に成な 左様で御さる 去ながらあのやうにおしやるに依て是ハよますハ成まい よませられすハ成ますまひ ノウく御亭主某ハ久しうたをよまぬによつてちとあんしねハならぬ其間ハそちをむいておくりやれ 何かさて畏て御坐る 七本八本 シ、七重八重 申し今のはちとちかふておりやる 何とて御さる 七重八重で御坐る まつハ上の五文字かおもしろふ御さる跡を承りませう 只今申そふ 九ツ時 シ、九重とこそおもひしに 申しまたちかいました さいく違ひまする何とて御坐る 九重とこそ思ひしに 是はおもしろふ御坐る其跡は何とて御坐る 只今申そふ はらりとひらいた シ、十重咲出るや 十重咲出る あのやうな人にハ恥をかゝるかよふ御さる 申し御亭主またちかいました 何とて御坐る 十重咲出るて御坐る 是ハおもしろふ御さるちと吟して見ませう ヤ 吟してミませう 勝手に召れ 七重八重九重とこそおもひしに十重咲出る是ハおもしろふ御さる其跡ハ何とて御さる 只今申そふや 是ハいかな事太郎官者かとれへいたか太郎官者く 申く その跡ハ何とて御さる 太郎官者かミへませぬ うたに太郎官者ハいりますまひ いるやらいらぬやらそなたか何をしつて太郎官者く 申しまつ是へ御されその跡ハ何とて御さる あまりおもしろ

ふ無程に聞すと置しめ おもしろふ無といふて聞すに置くゝものか  
ひらにおしやれ 夫ならハ跡からいふておこそふ 何とそのやうな  
事があるものかひらにおしやれ 今の跡は七重八重 夫はかてんし  
や其跡の事しや その跡ハ九重とこそおもひしに 夫もか点しや  
其跡の事しや 十重咲出るておりやる 爰な人ハそれでハウたの字  
かミしかいといふ事しや 何しや字か短ひ夫ならハなかふしておま  
そう 何とて御坐る 十重咲出る引といつまでもなかふひかしめ  
是ハいかな事それでハ字か足らぬといふ事しや たらずハたしてお  
まそふ 何とて御さる 十重咲出るいづるやくと足程におしやれ  
爰な人ハ弥某をなぶるか十重咲出るの跡をいわねばあとへも先へも  
やる事てハなひそ たつた今おもひ出した 何と ものと 何と  
十重咲出る とへ咲いつる 太郎官者か向ふすね 何のやくたいな  
しとつとお行れ めんぼくも御坐らぬ

#### 不腹立

罷出たる者は此当りに住居致すもので御坐る某志の深いもので此度  
草庵の建立いたして御座るかいま是へすへまする御住寺か御座ら  
ぬ又某斗りても御さらぬ爰に今耆人申合た御方か御さるによつて是  
へ参り相談のいたそふとそんなるまつ急て参らふイヤ誠にかふ参つ  
ても御宿に御座れハよふ御ざるか御宿に御坐らぬ時はまいつたせん  
も無事て御坐るイヤ何かと申うち二是て御坐るまつ案内を乞ふもの  
申案内申 表に物申とある案内とハ誰そ もの申 となたて御坐る  
私て御坐る こなたならば案内に及ませふそ通りハなされいて 左

様にハそんなして御坐るか若御客ばし御さらふかと存て夫故案内を乞  
まして御坐る 夫は近頃念の入た事て御坐るさて今は何とおもふて  
出させられて御さる 唯今参るも別の事ても御さらぬ兼而の草庵も  
ぜうじゆいたして此様な満足ハ御座らぬ 仰らるゝ通り此様な目出  
度事ハ御さらぬ 夫ニ付こなたの方に似合舖い御出家か御座ります  
るか 私の方にハ似合しい御出家か御坐りませぬ 某か方御坐らぬ  
依て私のそんなしまするか今日ハこなたと私と上下の海道へ参り似合  
しい御出家の通られたならハ言葉をかけ御住寺に頼ませうとそんな  
しまするか何と御坐りませう 是ハ一段とよふ御さりませう さてハ  
こなたも御同心て御さるか いかにも同心て御坐る それハ一段の  
事て御さる 夫ならハ私から参りませうサア御坐れく 参ります  
御座れ 夫ならハ私から参りませうサア御坐れく 参ります  
るく イヤ申今日ハ天気もよふ御さるによつて上下の海道へまい  
つたならハ似合しい御出家の通られぬ事ハ御坐りますまひ イヤ何  
かと申内にはハはや上下の海道て御坐る此所に待合て能御出家の通  
らせられたならハ言葉を掛けませう それかよふ御坐る 是ハ東国  
かたの出家て御さる某いまた都を見物いたさぬによつて此度思ひ立  
都へ登り爰かしこを見物いたしたまた能所もあらハ足をも留うと存る  
先急てまいらふ誠にミな人の仰らるゝにハ若ひ時に旅をせねば老て  
のものの語りか無と仰らるゝに依てふとおもひ立て御坐るあわれ能所  
もあらば足を留度もので御さる イヤあれハ一段の御出家かミへま  
する言葉を懸ませう 夫かよふ御さる なふくし、申 ヤアく  
こちの事て御さるか何事て御さる いかにもこなたの事て御さるり

やうしな申事なからこなたハとれからとれへ御さるぞ 愚僧は風に木の葉をまかすることくて御坐る 是は面白いおこたへて御坐るか子細はし御さるか いかにも子細か御坐る惣して木の葉と申ものハ風か吹何方迄も参りまするまた吹ねば其俣留りまする愚僧もそのことくとめてかあれハとまりまするまたとめてかなけれハ何方迄も参るに依ての事て御さる 子細を承れハ尤て御坐る夫ならは私かとめうと申てもとませらるゝか いかにもとまりまする 夫は一段の事て御さるか様に申も別の事てハ御さらぬ某ハこゝろさしのふかひものて此度草庵の取むすんて御さるかいまは是へすへまする御住寺か御坐らぬこなたハ御住寺を勤て下さりやうか 夫は私の望所て御さる さてハ御同心て御坐るか いかにも同心て御坐る 夫ならハ今壹人申合た御方か御座る是に引合せませうこなたハ逢て下されい何かさて心得ました イヤ申ゝとめうと申て御坐れハ止らふと申されますこなたもあれへいて逢せられい 心得ました 申ゝ此仁かとめうと申て御されハ早速とまつて下されて忝ふ御坐る 何かさて私の望所て御さる さて今からもいて下さるゝか 何時なりともまいりませう 夫は一段の事て御坐る夫ならハこなたから御され 何かさてこなたから行せられい 夫ならハ私から参りませう こなたハ御座らぬか 先こなたから御され 其儀ならハ中をへだてゝまいりませう 夫かやう御さる サアゝ御座れゝ 参りまするゝか様に言葉をかけて同道いたすも他生のゑんて御さりませう 是も仏の御引合て御さる 其通りて御坐るさてこなたにハものをかゝせらるゝか かくと申程の事てハ御坐らぬか雀のおどつた足跡やまた

ハみゝづののたつたよふな事をいたして心覺をいたしまする 夫は一段の事て御坐るかやうに申も別の事てハ御坐らぬ我らハ子供かあまた御坐るに依て行ゝハ手習を教て下されい 子供衆へおしへまするハ私の得ものて御坐る 「」は一段の事て御坐る もしきやう御そんして御坐るか「」 ちとまつて下されい 心得ました 先私の覺へましたハ観音地藏經しゆからかひのかひぞふす迄ハおほへて御座るかもし經と申ハついにミタ事も御さらぬ 夫は此仁の申様か悪う御さる若經ばし御そんしかと申事て御さる 出家の事なれハ今の程ハ覺て居まする 夫はあつはれな事て御坐る扱最前からこなたの御名を承りませぬか何と申まする 私の名て御さるか 中ゝちとまつて下されい 心得ましたさていな事につまらせられて御坐る 其通りて御さる 是はいかな事某か寺に居る時分新發意ゝ呼れて今に定る名か御坐らぬ何と致ふ 申ゝ御名ハ何と申まする 出家と成と坊主となりと呼せられい 其様な事があるものて御さるぞひらに御名を仰られい 腹たてずの正直坊と申まする 是はなかい御名て御さるか是も子細か御坐るか いかにも子細か御さる先私は寺に居る時分よふじ壹本箸かたゝとりちかへた事かなし其うへいかやうの事か有てもはらを立ぬとあつて師匠の腹たてすの正直坊と付られて御さる 子細を承れハ尤て御坐るちとまつて下されい 心得ました 申ゝ今のを聞せられて御さるか世に正直な者ハあれとも腹をたてぬものハ御座りますまひ私の存まするハあの出家を散ゝになぶつて腹を立すは御住寺に頼ませうまたはらを立たならハまいすて御さる追返してやりませう 是ハ一段とよふ御さりませう 夫な

らハこなたも夫へ出て名を聞せられい 心得ました申と私ハあれに居ましてこなたの御名を承りませぬか何と申ます 腹立すの正直坊と申ます 是は能御名で御坐る何とやら光りか差やうて御坐る左様にも御さらぬ 申と私はもの覚か悪う御さる御名を忘れて御坐る何と申ます 唯腹を立ぬ正直なものと思召ハ濟事で御さる 是はよい御名で御坐る何とやら御光かさすやうて御さる 左様にも御座らぬ ヤイ和坊主己か名ハはらくのせうかち坊か 其様な名があるものか腹立すの正直坊じや そりやはらを立たく イヤく腹は立ぬく ヤイ和坊主己か名ははらくのはらくの子か 生くさやく出家に其様な名があるものか腹立すの正直坊じや それ腹を立く はらハ立ぬく ヤイ和坊主己か名ハはらくのせうし骨か 其様な名か有ものかはら立すの正直坊じや そりやはらを立く 腹は立ぬく 和坊主己か名ハはらくのはらくのけか 其様な名かあるもの腹立すの正直坊じや そりや腹を立く はらハ立ぬ そりやはらを立く くく まつ待て呉さしめ 何事じや愚僧ハはらは立ねとも右からも左からも其様におなふりやるに依てがうかにゆるいやい あのやく躰なしとつと、行しめ 面目も御坐らぬ

#### 居杭

是ハ此当りに住居致す居杭と申者で御坐る爰に御目を下さるゝ御方が御座るか是へさへ参れハ居杭よふ来たと有てあたまをはらせらるゝか迷惑さに清水の観世音へきせひを掛けて御坐れハ此頭巾の給ハ

つて御坐る今日ハあれへ参り頭巾のきとくをミやうと存る先そろりくと参らふイヤ誠にこの頭巾を着たれハあたまをはられぬか但しはられてもいとふ無か奇特の無事ハ御坐るまいイヤ何かと言内三是て御坐る先案内を乞ふも申案内申 表にもの申と有かあれハたしかに居杭か声で御坐るなふく居杭おりやつたか此間ハなせにミへなした 此間は田舎へ参りまして夫故御不沙汰いたしまして御坐る某は其様な事とハしらす誰そなか事ても言たかと思ふて氣遣ふたハやい居杭 たれもなか事ハ申ませぬか有様ハこなた様へまいれハ居杭よふ来たと有てあたまをはらせらるゝか迷惑さに夫故御不沙太申まして御坐る イヤくそちかあたまをはる事は憎うてはるてハないかわゆさかあまつての事しや心にかけな居杭 御存の御方はよふ御坐るか御そんし無御方ハあの居杭ハ「」たまをはられても何か嬉しうて御出入をするかと思召所か氣の毒に御坐る そちかあたまをはる事ハ何れも御そんしの事じや心に掛な居杭是ハいかな事居杭かミへぬ居杭く扱もくこの頭巾を着たれハミへぬそふなちと鼻の先へ参らふ 居杭くヤイ奥へ居杭ハ行ぬか 弥ミへぬそふなちと頭巾を取て参らふ是に居ります エイ居杭どれへおりやつた 今表て人かあいたひと申ましたによつて表へ参りました 是ハいか事たまく人の内へ参つて表へ出るといふ事か有るものかかう通れ 私「」是か勝手に御坐る 夫に置に依ての事しや是非とも通らしめ 其儀ならハ心得ました さてかう通して置て五日も十日も逗留させあたまをはりたからふ程はらふぞ居くる たとへいねと仰られても五日や十日てまいる事てハ御座らぬ またいなふといふ

てもいなす事てハなひぞ居くるや。是ハいかな事又居杭かミへぬ居杭く。占や算うらの御用しかも上手く。イヤ是へ算置か参つた一人さん置てもらおふなうく。」「ヤアくこちの事て御さるか何事て御さる。」「の事じやりやうしな申事なからそなたハ算置か。いかにもいん陽て御座る。夫ならハちと頼ミ度事か有先かう通つてくれさしめ。心得ました是ハこなたの御やしきて御坐るか。いかにも某かやしきておりやる。先ハ四神相応と申五百八十年万々年も御子孫御はんじやうの御家の図とミへます。外の者かほむると違ふてそなた達かそふ言てくるれハ近頃よろこばしい事しや。我々のぞんせいてかなわぬ事て御坐る。さて頼ミ度事か有程にま。」「居てくれさしめ。心得ました。扱御頼ミなされ度とハいか様の事て御坐る。別の事ても無か失ものておりやる。其失ものハいつの事て御坐る。今日唯今の事しや。今日只今ならハ<sup>昨日</sup>先手うらを置いてみませう。夫かよからふ。たんでうけんろきなん口くしれまして御坐る。是ハ生類て御坐る。シテ扱きやつは上手て御坐る。うたかいも無生類て御座る。まいかにも生類ておりやる。此生類かおふたて申てハ御さらねとも私の算ハよふ当ると有て何れもの有名をハ仰られいてありよふかありよ口口きたかおりやつたか杯と仰られます。そふてあらふともさて此生類かこのやしきをはなれたかはなれぬをミてくれさしめ。先ハ広とした御やしきて御されは手占の分てハしれませぬ。一算置てみませう。夫かよからふ。先今日のこなたのけたいか。是に当ております。某杯の知らぬ事しや。御素人の御存無事て御坐る。唯今置出しておめて掛けませう。是ハ珍ら

敷算ておりやる。こなたハ御素人かと存て御座れハ能所へ御心か付ました。是ハ天狗のなけ算と申て私の家ならて他に無算て御さる。そふてあらふ。是を算木くばりといふて取直します。秘事にいたします。そふ有ふ。一徳六海の水二木七曜の火三じやう八難の木四せつくやくの金五きとふの土水性木もくせう火火性土土性金金性水金こくもくくイヤ申算ハしゆんにそふしゆういたしめ出度算て御坐るか。爰にきんこくもくとこくいたして御座るによつてちと六か敷御坐る。去なからおふかたハしれました。此失ものハおやしきさて置一間をはなれぬと御坐る。一間の内に居てミへぬものてハおりない。して何て御坐るぞ。人ておりやる。ヤ人。中く。人ならば此疊り霞もなひ御座敷てミへぬはつハ御坐らぬか。夫に付て思ひ当る事かあるによつて居所をさしてくれさしめ。夫ならハ今一算置てみませう。夫かよからふ。大水出れは堤のわつらひ。何と尤な事てハ御さらぬか。いかにも尤な事じや。大風吹ハ古家のたゝりあちらとこちらハ隣り也けりくイヤ申知れました。居所を申さハこなたの左りの方に座して居りまして私の置算をきつとミて居ると御さります。某か左りの方にハ何もミへぬ。かふ見た所はミへませぬか。最前から算のおもてをかんかへまするにきやつは仏神のかこを得たものて御坐る。其上神かくしなと、いふて有事て御坐る。ちとさかして見させられい。心得たやつとな。何と御手にハさわりませぬか。イヤく手にハ当らぬ。さてくあぶなひめにあふて御坐るとらへらりやうといたした所を替う。イヤ申くはや所を替ました。今度ハ何方に居るぞ。今一算置ねば知れませぬ。今一人さん置てくれさしめ。心得ま

した犬土はしれハ猿木に登る鼠けたはしれハ猫きつとミたりくし  
れまして御坐る今度ハこなたと私の間に居ましてこなたの顔を一め  
しろりわたくしの顔を一目しろりミて居ると御坐る 最前から其様  
におしやるかこなたと身共か間ハ何もミへぬ 最前も申通りきやつ  
ハ仏神のくわこを得た者て御坐る其口最前ハこなたかこわ高に仰せ  
られたに依て聞取て逃たもので御さる此度ハこなたと私ときやつを  
たらしてさかしませう 是ハ一段とよかるふ かならずぬからせら  
るゝな 心得た ヤツトナゝ 何と御手にハさわりませぬか イ  
やく手にハさはらぬ またとらへりやうと致したイヤ致しよふ  
か御坐るいかな上手ても是を取たならハ算ハ当るまいと存る イヤ  
申く最前のうら算のあはぬこそとふりなれ此よふに八卦本を取ち  
らし其上算木か壺本も御坐らぬこなたの持せられて役にたゝぬもの  
て御坐る返させられい

#### 清水

是ハ此当りに住居致す者て御坐る此間のあなたこなたの御茶の湯ハ  
おびたゝしい事で御坐る夫ニ付某も近ゝ何れもを御茶で申入うと存  
る先太郎官者を呼出して申付うヤイゝ 太郎官者有かやい常の通り  
汝を呼出も別の事てもなひ此間のあなたこなたの御茶の湯ハ何とお  
ひたゝしい事でハないか 御意の通りおびたゝしい事で御坐る 夫  
ニ付某も近ゝ何れもを御茶で申入うと思ふがなにとあらふぞ 是ハ  
一段とよふ御坐りませう 又茶ハ水か第一しやといふか何方の水か  
よからふぞ まつ私の承りましたハ柳の水かさめが井か又ハ野中の

清水かと申まするか中にも清水か一よひと承て御坐る 某もそふ聞  
た汝ハ大義なから今から清水へいて水を汲て来てくれい 畏てハ御  
坐りまするか七ツ下て清水へ参れバがごうじとやらが出ると申す  
る是ハゆるさせられい イヤゝ夫ハ子ともたらしにいふ事じや先  
夫にまて 畏て御坐る ヤイゝ是ハ某かひその桶なれとも是を  
やる程に早う汲てこひ すれハとふ有ても参りまするか 中ゝ  
其義ならハ畏て御坐る はやう行け 心得ました エイ ハア 扱  
もゝ俄な御用を被仰付て御坐る今参ハ苦敷御座らぬか御客の有度  
に参らふならハめいわくて御座る何と致そふイヤいたしやうか御ざ  
る アゝかなしやくたすけて呉ひく イヤ太郎官者の声かする  
何としたくゝとなたて御ざる 某しや何とした 頼ふた御方で御  
ざるか 某しや 跡からたれもおふては参りませぬか イヤゝ追  
てハこぬか何とした 先胸のたくめきを直しておはなし申ませう  
夫かよからふ 先清水へ参て水を汲うと存て上の青ミどりをかきの  
けて御坐ればうしろの山かどふくゝとどゝめきまするによつて何事  
かとそんなて振返て見て御坐れハいかめな鬼が outcome して御ざる ホ  
ウ ヤイ七ツ下て此清水へ来るハ定めて武辺立(「立」に濁点)ててあ  
らふあたまから一口にいてくらおふハアト申ましたによつて今くわ  
るゝかくゝとそんなてよふくゝ是迄にけのびて参りましたかこなた  
にハ太郎官者を壺人ひろハせられたと申者て御ざる 扱ゝ夫ハあ  
ぶなひ事で有たし桶ハ何とした 桶の 中ゝ 余り鬼がけハしく  
追欠まするによつて鬼のつらとおほしき所へ桶をほうと打付跡をも  
見すしてにけて参ましたがあとてわりゝゝとかみわる音かいたし



まして御ざる 爰な者ハ某かひそふの桶を鬼にかミわらすといふ  
事か有ものか あの桶ハもとめさせられたならハ御さりませうが此  
様な太郎官者ハ又とふたりハ御座りますまひ 汝壺人や二人に替桶  
てハなひゝヤイ 夫ハ又余りおなさけなひ御言葉で御ざる 某ハ桶  
かほしいイテ見て参らふ 先待せられい まてとハ 清水へ鬼の出  
るハ誠で御座る 汝が何を知てスツコンテいよハア 是ハいかな事  
あの機嫌でハ行かすにハおかれまひ鬼ハ出まひか何といったそ夫  
く爰に風流の面か御坐る是を着ておとそふと存る 扱くかてん  
のゆかぬ事で御ざる先急で参らふイヤ誠に此間清水へ鬼の出るはな  
しを承わらぬかあれへ参たならハ様子のしれぬ事ハあるまひイヤ来  
る程に清水で御ざる此当りに鬼らしいものハなひかしらぬ イテく  
らおふ のふかなしやくたすけて被下ひく ヤイ七ツ下て此清  
水へ来るハふへんたて(武辺立)と墨で傍記)ゝあらふあたまから一  
口にいてくらわふハア 命をたすけて被下れい おのれ命かたすか  
り度か いかにもたすかりたひ 夫ならハ此鬼のいふ事を聞くか  
何成とも承りませう 汝ハ太郎官者を壺人召遣ふとな よふ御そん  
して御坐る 身ともハ知つて居る其太郎官者に夏蚊帳を釣らせぬと  
な いつもつらせまする 身ともか知つて居るそもやそも蚊かくふ  
て寝らるゝ事でハなひ此上ハつらそふかつらすまひか つらせま  
すゝ つらさぬにおひてハいてくらわふ たすけて被下ひつらせ  
ますゝ 何しやつらそふ 中く まだ有あの太郎官者ハ酒か  
すぎな夏ならハひやしすまし冬ならハかんのしすまひてもうい  
やくといふ程のまそうかのませまひか のませまするゝ のませ

ぬにおゐてハ一口にいてくらわふハア のませまするゝ のまそ  
う 中く 夫ならハ鬼の言ふ事を聞たに依て命をたすけてやらふ  
又此鬼の行すかたをミるな 見る事でハ無ひ 見おるまひぞ 見ハ  
せぬ そりや見たハいてくらわふハア 見ハせぬゝ 見るなとい  
ふに ミる事でハ無ひ 見るな 中く 見る事でハなひそ  
ふくおそろしや誠に鬼か出て御さるゝいそゐてもとるふと存るおも  
へハく今ハあぶなひ事で有た 知らぬ躰で「」参らふと存る  
ヤイ太郎官者 エイ頼ふた人 「」ハとれい行 こなたか余り  
おそふ御ざるによつて御迎に参つて御ざる いらぬ迎たての こ  
なたハ御色か悪う御ざるが何そにあひハ被成ませぬか 爰な者ハ諸侍  
か物に逢ふて色のへんするといふ事か有ものか かくさせらるゝな  
此当りにちりか付ております 夫ならハ当りに人ハ無ひか たれ  
もおりませぬ 是へ寄れ 心得ました またよれ 畏て御ざる ツ  
ウト寄れ ハア アノ清水へいたれハいかめな鬼か出てな 夫ミさ  
せられい私の申さぬ事で御ざるか 「」りなからあの鬼ハ殊の外  
汝をひいきしたか汝ハ鬼に親類ばし有か たしかいとこおにとやら  
か有と申まして御ざる 鬼の親類役にたゝぬ出て行く 先また  
せられる夫ハツウト昔の事で御ざる 夫ならバよひさて汝かいた時  
に鬼ハ何といふた 鬼の 中く ヤイ七ツ下て此清水へ来たハ定  
めてぶへんたてであらふあたまから一口にいてくらわふハアト申ま  
して御座る そふいふたか 中く ちと夫にまて 心得ました  
是ハいかな事清水の鬼の声と太郎官者かこへとひとつて御ざる今一  
度承わらふと口んするヤイゝ太郎官者汝がいた時鬼ハ何といふた

いてくら」「申ました □ふでハなひ今のよふにいへ 取てかもふと申ました そふても無ひ最前のよふにいきほひ懸つていへきほひかゝつて申まするか 中く ヤイ七ツ下て此清水へ来たハふへん立てあらふあたまから一口にいてくらわふハアト申ましたそふいふか 中く とふ有ても桶かほしいいてミて来る 先またせられい まてとハ 扱ハこなたの事で御さる こなたの事とハ一度のこりませて二度の死をとぐるとはこなたの事で御坐る 汝か何を知つてスツコンテいよ ハア又出ずハ成まひ 扱く腹の立事で御さる先急て参らふイヤ誠に太郎官者かたらいたものであらふ此度出たならハ只置事でハ御さらぬイヤ来る程にはや清水で御さる此当に鬼ら敷い物ハなひかしらぬ いてくらわふく ゆるしてくれいく いてくらおふハア ヤイおのれハ太郎官者てハなひかいてくらおふ なんのいてくらおふよう身とをたらしおつたあのおふちやくものとりへて呉ひやるまひそ ゆるひて被下ひく

#### 鷹盗人

遠国に隠もなひ大名で御坐る永と在京する所に訴訟思ひの俣にかなひ安とのミきやう書を給ハリ新地を果分に拝領いたし国元への御暇迄を下されて御坐る先太郎官者を呼出しよろこはせうと存る常の通り 汝を呼出も別成事てもなひ永と在京する所に訴訟思ひの俣にかなひ安とのミきやう書を給ハリ新地を果分に拝領したハ何と目出度事でハ無か 兼とか様の御仕合を待ます所に一段と目出度御坐る 夫よくまた悦事か有 夫ハいか様の事で御坐る 国元への御

暇迄を下された 重ねく思召俣の御仕合で御坐る 其通りじや扱是といふも何レもの御執成故しやとおもふによつて何レもをどつと振舞て其上て下らふとおもふか何とあらふそ 是ハ一段とよう御坐りませう 夫ならハ台所に肴物か有か 何も御坐りませぬ 其儀ならハ肴町にハあらふか 肴町に無と申事ハ御坐りますまひ 其儀ならハ今から肴町へいて肴物を求てこい 畏て御坐る はやう行け 心得ました エイハア エイハア エイハア 扱もく目出度事で御坐る先肴町へ参らふと存るイヤ誠に此間ハ浜かあれて御坐るか何」「あれハよふ御坐るイヤ何かといふ内に肴町で御坐る此当りに」「や是何やら有申御亭主是ハ何て御坐るぞ初鷹で御坐る あたらしう御坐るか 随分あたらしう御坐る 代もつハいか程で御坐るぞ 三百疋で御坐る 是ハ高直二御坐る二百疋にまけてくだされい 夫ならハまけてしんませう 夫は忝ふ御坐る其儀ならハ持て参りませう 是と代りをおゐてゆかしめ そなたハ身共をしらぬか頼ふた人の御内の太郎官者しや 其頼ふた人からして知らぬものを何と代りなしにやらるゝものか 是は尤しや其義ならハ代りを持て参る程に其間ミせを引て居てくれさしめ 何か扱心得た去ながらおそるとみせを出すそや 心得ておりやる 先急て代りを取てまいろう 頼ふた人も頼ふた御方で御坐る何と代りなしに肴物をおこすもので御坐るぞ何かといふ内に戻り付たイヤ申頼ふた人御坐りまするか太郎官者かもどりました エイ太郎官者か戻つたそふな太郎官者戻つたかく 御座りまするか エイ戻つたか 唯今で御坐る ヤアくたい義や骨おれやシテく肴物を求て

来たか まんまと求て御坐る 何「」 初鷹を求て参りま  
した 何しや初鷹「」 たてかいたく是へ見せい また肴町  
に御坐る 爰な者ハ肴町に有物が明日の用に立ものか 代りを持て  
参らぬによつて亭主かおこしませぬ なせに身ともか内の者しやと  
いわぬ 其通り申て御座れハこなたからしてしらぬと申まする 是  
ハ尤しや先度汝に渡したあれハ何としたぞ 最早久しい事で御座れ  
ハ御坐りませぬ 恥かしい事じやか某か方にも無か何とせうぞ 兎  
角御振舞を延〇せらるゝかよふ御坐る 夫〇ならぬ事しや汝かるす  
に何もへ人を廻したれハ何れも御出なさりやうとの御事じや 扱ゝ  
夫ははやまつた事を被成て御坐る 汝は才覚なものしや鷹の只とる  
ふんへつとせい 鷹の唯取分別ハ御坐らぬか何としてよふ御坐りま  
せうぞ なにとしてよかるふぞ イヤこなたか肴町へ行かせらるれ  
ハ済まする 夫は安いおしつけて行ふ 先待せられひそこか分別て  
御坐る最前三百疋と申鷹を二百疋に直なひて置ました代りを取て  
「」る間見せを引てくれひと申て御坐るか最早久鋪事て御坐れハ  
見せを出したて御坐りませう所へこなた御出被「」 求ふと  
仰られたならハ亭主ハ御仁躰と見うけて直をよふ上ませう亭主の申  
俣に求させられひ 求とふても代りかなひ そこか分別て御坐る所  
へ私が参りて代りを持て来た程に鷹の持て参らふと申さは 亭主ハ  
こなたへ直よふ上た事なれハおこしますまひ是非共に持て参らふと  
申ませう程にこなたにハ私をしからせられい私も慮外を申ませう程  
にかんにんならぬといふて御刀の柄に御手を掛させられひ亭主ハ何  
事を置て留ませう其間に鷹を取てハ何と御坐りませうぞ 是ハ一段

とよかるふが此納た御代に喧嘩は何とあらふ 是作り喧嘩の事で御  
坐れハ苦敷御座りますまひ 誠に是は苦敷有まひ肴町〇何方しや  
是をまつすくに行かせられて左りへひじたをらせらるゝと角から三  
軒目のあたらしい家て御坐る 其当りハ覺て居る夫ならハ汝ハつが  
ゐの拔ぬよふに来てくれい 畏て御ざる エイ ハア 扱もく才  
角な者て御坐る鷹の只取る分別と致て御坐る先肴町へハ是をまつす  
くに居て左りへひじ手折と角から一軒二軒三軒則是しやヤイく亭  
主く ハア 是は何ぞ 初鷹て御坐る あたらしいか とりぐ  
で御坐るに依て随分新らしい御坐る 代物ハいか程じや 五百疋て  
御坐る 五百疋にかわんずくとれへもやるな 畏て御坐る 太郎  
官者ハ最早見ゆる時分て御坐る 太郎能時分て御坐る参らふと存る  
申亭主御坐るか代りを持てきた此かんの持て参る 是とまつ持〔待〕  
の符字かたしめそなたかあまりおそゐてよつてあれに御坐る御方へ  
直段をよふ上たやる事ハならぬ 是ハいかな事それしやによつてミ  
せを引てくれいといふた是非とももつて参る やる事ハならぬ ヤ  
イくヤイそこな奴 ヤア ヤアとハ己憎ひ奴たかものなれハ身共  
か鷹に手をそゆるぞ こなたも御仁躰て御さるか鷹つれの事に主の  
名をなのられるもので御坐るか 己れそのつれをいわゝ為になるま  
ひ 為にならぬといふて何とする 目にものをミせう 夫ハたれか  
身共か そなたの分てふかしひ事ハ有まひ ていどいふ ていどい  
ふか何とした くやミおるな 何のくやむものか 亭主そこをのけ  
一付にしてやらふ まつ待たせられい 亭主か御わび事を申まする  
亭主かわび事か 左様て御坐る 近頃にくる奴なれとも夫れならハ

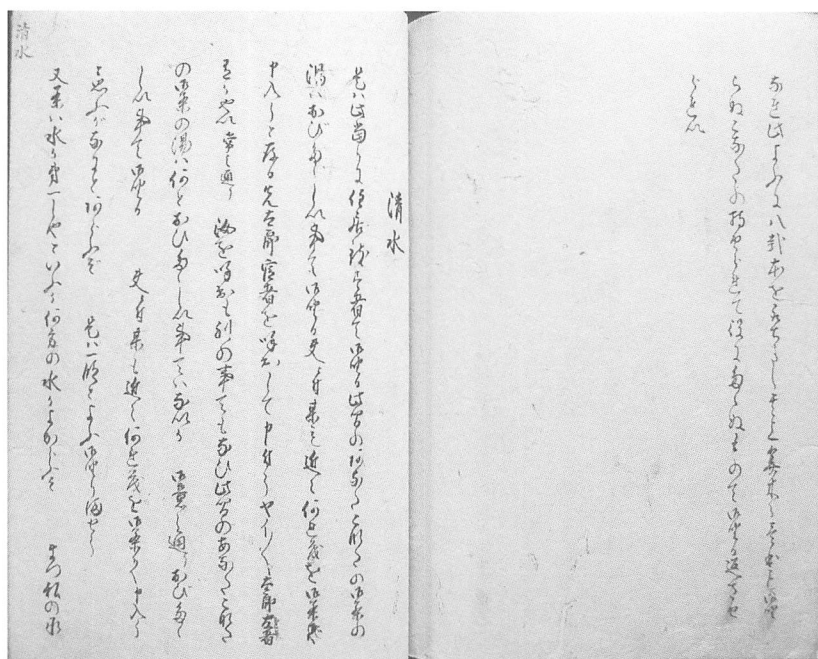
ゆるしてやるぞ ありかたふ御さる南無三宝願のしてやられた 太郎頼ふた人ハ何となされたしらぬ 太郎官者ハ何としたかしらぬエ イ太郎官者 頼ふた御方 今のけんくわハ何と有た 一段とよふ出来ました 夫ハ一段の事しや扱汝ハ鴈の取たか かんをとりまして御坐るかこなたハ早い事を被成ましたの 早い事とハ けんくわの内棚のはしへ御手か参りまして御坐るかあれハ何て御座る 爰なものハ諸侍かその様なさもしい事をするものか 夫ならハ私も鴈をとりませぬ 夫ならば当りに人ハなひか 誰もおりませぬ 夫ならば是へ寄れ 心得ました また寄れ 畏て御坐る つつと寄れ ハアあまりけんくわかよふ出来たによつて国許へのミやけにせうとおもふて是をとつた 私も鴈をとりまして御坐る 夫こそ目出度けいそめて毛を引 ハア エイ ハア

### 飛越

罷出たる者ハ此当りに住居致す者て御さる今日ハ山沓ツあなたに茶の湯か御さるか夫付てたんな寺の新発知か茶の湯にゆかはさそふてくれいとのかよくそくて御さるに依て是をさそふて参らふと存る先いそめて参らふイヤ誠にかう参つても御宿に御座れハよふ御座るか御宿に御さらぬ時ハまるつたせんもなひ事て御座るイヤ何かと申内にて御さる先案内を乞ふ常の通り 今日参るも別の事てハ御さりませぬ山沓ツあなたに茶の湯か御座るかあい客ハ某次第と申て参りて御さるかこなたハ兼而約束て御さるに依ておさそひに参りましたそれハよふこそ誘ふて下されて御さるか去ながら今日たまゐられぬ

事が御さる 夫はいか様成事て御さる 師匠か留守て御さるに依て私ハ参りますまゐ 夫は幸て御さる御師匠へハ某か能よふに申そふひらに御され 其儀ならハ心得ました 先こなたから御され 夫ならハ私から参りましよふサアく御されく 参りまするくイヤ申惣して茶の湯なそと申物ハ手前の稽古斗りてハあらぬ物て御さる人の手まいへもよう心をつけておほへさせられい 何かさて心得ました 何かと申内にて是ハ飛越へ出まして御さる 誠に川へ出まして御さる 川と申程の事てハ御さらぬ飛越て御さる私ハ飛ますることなまとはせられいやつとな こなたハはやとはせられたか こなたもとはせられい 私ハこをふて飛れませぬあれからハしりかゝつて飛ませう いかよふにしてなりと飛せられい 心得ました飛ますそとはせられい イヤア ヲ、あふないく 是ハいかな事まんまと飛すまいた物をこなたか声をかけたに依てこをふて飛れませんそれかしに声をかけねハ川へはまる所てあつた 兎角めかをくひやうて水をミるとこをふて飛れません今度ハ目をふさきてまたあれからはしりかゝりて飛ませう いか様にしてなりともとはせられい 心得ました 此当りてよふ御さるか 其当りてよふ御さる 飛ますぞイヤア あふないく 是ハいかな事今度こそハ飛すまいた物をまた声をかけたに依て目かほつちりと開て飛れませぬ また声をかけねハ川へはまる所てあつた とふ有ても飛れませぬ私ハ戻りまする 是とまつをまちやれ 又是へ御さつたか こひてなんとせう平に飛せられい とふあつてもとはれませぬ それならは私に引そうてハ何と御さりまする いかにあたくしかをくひやうてもこなたに

ひつそふたならハ飛れぬ事ハ御さるまる 夫ならは是へ寄らせられ  
 い 心得ました 何とよふ御さるか 一段とよふ御さる 飛まする  
 ぞく 飛せられい やつとな ア、かなしやくみ、へも水か入  
 一しほになつた 是ハいかな事は斗りのみそ川を飛かねてあの形ハ  
 ぬれねつミのやうな 是と人の川へ落たをせうしにハ思ハひて何か  
 おかしい そなたの川へ落たハ氣のとくにハあれとも其形ハぬれね  
 づみのよふな 是と人の身上にもをかしい事が有物しやそなたの身  
 のうへにもおかしい事かあろう 人ハしらす某か身の上にをかしい  
 事ハ有まい いふたならハ恥をかこふ 恥をかく覚へハないあらは  
 をしやれ 夫ならはいをう それせんとかわらにすもうか有たてハ  
 なひか 夫かをかしいか 先を聞きやれ西方からちいさな男が出て  
 ひかしの角力をみなひらうた角力ハ無といふに依て身共も戻ふとし  
 たれハまたすもうこそあれといふに依てたかするかと思ふて立戻て  
 みていたれハそなたか出たてハないか 身共か出たかおかしいか  
 先をき、やれ何か出ると其俣かの小さい男にきりくくと押廻し目  
 よりも上にさし上られ土俵の真中へつていとふなけられたてハない  
 か 角力ハ勝も負るも時の習じやそのまけたかをかしいか まけた  
 ハをかしようハなひかこしを打たとみへてかた屋へ御免あれちんかり  
 く能形であつた そなたハすまふしまんな一はんまいろふ 某ハ  
 茶の湯にこそきたれ 角力取にハ参らぬ 取すにハおくまい ま  
 たとつたり共まけわすまい いざ御坐れ 心得た いやアく ま  
 いったの勝たぞく やい、く角力ハ三番の者じや今壹番取やるま  
 いぞく、く



〔居杭〕 末尾と〔清水〕 冒頭

〔付記〕 本稿は平成二十三年度、平成二十六年度科学研究費補助金・基盤研究  
 (C) (一般) 「近代宝生流能楽史の地方展開」の研究成果の一部である。